



茶室自体は四畳半だが、障子を明け放ち、縁側に絨毛氈を敷けば八畳として使える。軒や開口部は座って庭を見る視線を意識して低く抑えられている。

デッキは、毎日いちばんよく使う「部屋」。 和庭は、季節の移り変わりを伝える。

DATA

吉野の家 (白楽邸)
所在地/鹿児島市吉野町
設計・施工/シンケン
造園/美・技・匠 庭吉
竣工/1999年8月
構造/木造2階建
家族構成/夫婦
敷地面積/453.53㎡
延床面積/141.95㎡
1階 99.95㎡
2階 42.00㎡

鹿児島県内を車で移動していると、斜めを向いた切妻屋根がときおり目に入ってくる。緑に包まれたちよつと雰囲気の違う家。それがシンケンの家である。シンケンの家が太陽エネルギーを活用した住宅であることは、鹿児島の人ならたいてい知っている。「だからお日様の向きに合わせて斜めに建ってるんだよね」と。ところが社長の迫英徳さんに聞くと、太陽の向きだけが「シンケンの斜め」の理由というわけでもないらしい。「僕はプランを考える時、家よりも先に木を描くんですよ。それを避けて家を描く(笑)。でも、ただ植えれば良いというもんじゃありません。最適な木の位置を確保す

るために建物を斜めに振っている、というところもあるんです」
ふつう、家は敷地に平行に片側に寄せて建てることが多いが、そうすると建物の周囲にできる隙間はデッドスペースになるだけだ。でも、家をギリギリいっぱい建てるにちよつと余裕を持たせて斜めに振れば、敷地の四隅を有効に活用することが出来る。「そこに木を植えてオアシスのようにするんです」と迫さん。
「四隅の一つは駐車場とアプローチ。ここにはまず外観のバランスを決めるシンボリックな木を植える。そして、二つめはキッチンからつながるデッキに。ここには木陰をつくってくれる木を植えます」



30年続けてきた茶道のために念願の茶室をつくった。戸を明け放つとしっとりとした和庭。新品だった躰もいい感じに苦むしてきた。

右/ダイニングの吹抜けを見上げると、デッキの真ん中に植えられたケヤキの木が見える。この木陰があるからこれだけ大きな開口部を設けることができる。左/コナラ、ヤマボウシ、モミジ、ムラサキシキブ、ヤブツバキ……。茶道のための庭なので決まり事はおさえてあるが、雑木林のような自然な風情である。



キッチンに直結したデッキは「いちばんよく使う部屋」と夫人。右手奥に見えるキッチンカウンターから料理やお皿を直接手渡してできるようにしてある。

内と外の
あいだを楽しむ家。



シンケンの手法 敷地の四隅に、役割の違う庭をつくる。

吉野の家 (鹿児島市吉野町)

取材・文 長町美和子
撮影 北田英治

塀で囲むことでより自由になったデッキ。
振り返ればリビングや和室の向こうに涼やかな和庭。

吹抜けの窓に満月が。たまたま居合わせたシンケンの営業マン荻田さんが団らんの様子をパチリ。シンケンの家は、視線が自然に外に向かうように設計されている。



これがシンケンスタイルの要だ。木陰があると人は外に出て行きたくなる。それも土の庭よりデッキの方が出やすい。デッキがキッチンに近いのであれば、ちょっとお茶をするにも食事をするにも、準備や片付けが苦にならないというわけだ。「そして三つめは眺める庭。和室から見えて安らぐ坪庭をつくり、最後の一つは雑多なものを置くスペースに充てます」

こうして木の位置を決めると、自然に開口の位置が決まってくる。開口部が決まれば間取りも決まってくる。なるほど、快適な環境づくりは外と内のすべてが絡んで成り立っているのである。

図面を見ると、家の周囲に木の印として大小の円が書き込まれているが、特に樹種まで書かれていない。丸印を見て、その木がどんな役割を担うのか、どんな木が適当なのかを読み取るのは、シンケンスタイルを熟知する庭師の仕事なのだ。シンケンの庭を手がけてもう19年になるといふ「庭吉」の田中敏さんは、丸印を見れば即座に「ここには目隠しが欲しいんだらう」「遊ぶ場所には陰が必要だらう」とその意図が手に取るようにわかるという。絶対に欠かせない「夏の夕日を遮るための木」は落日の角度よりやや南に植えるのがポイントだ。なぜなら日が落ちる数時間前に陰をつくるのが重要だからである。

「そういったことを考えて、現場の担当者や打ち合わせしながら樹種を決めていくんです。もちろんお施主さんの好みも反映させます」

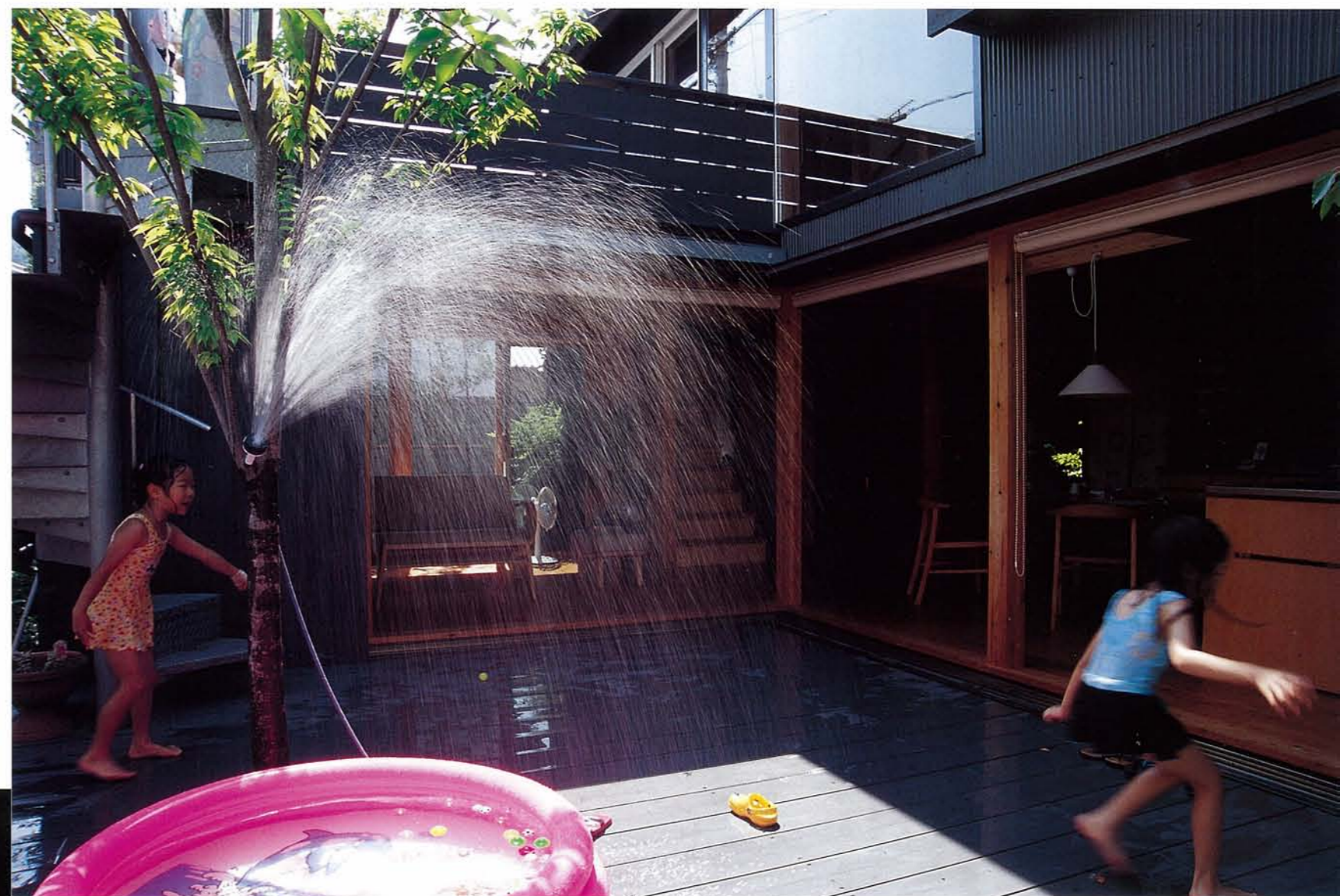
アプローチや和室の坪庭など、自然をうまく使った雑木林風の庭には、若い頃、京都の「宏流京都庭常」で修行を積んだ田中さんならではのセンスが光る。「坪庭は、手水鉢(蹲)を据える位置をまず決めます。リビングやダイニングからの見え方で決めることが多いですね」と田中さん。その鉢に紅葉の枝をどうかけるか、2、3年後にちょうどよくなるよう計算して植えていく。

「4〜5年すると植木はその土地に自分を慣らして力をつけ、変化していきます。その後は剪定。手を入れるのはお花を生ける感覚と同じです。人がつくった庭がだんだん自然に近づいていく、その移り変わりを予測し、楽しむ。庭は自然と人との共同作業です」

打ち水をした坪庭から、風が家の中を通り、ダイニングの向こうのデッキに抜けていく。ほの暗い和庭と対照的に、子どもの歓声が響き渡るデッキがまぶしい。「こうやって対角線上に視線が通るようにすると、小さな家でも広く感じることができると、小さな家でも広く感じることができると、小さな家でも広く感じる」とシンケンの庭には、単なる庭以上の情報とノウハウが詰まっていた。

シンケンの手法 敷地の対角線を見通して、広さを感じる。

原良の家 (鹿児島市原良町)



ケヤキの木にホースを絡ませて「見て、虹!」と大はしゃぎの美伶ちゃんと友達の高佳ちゃん。プールにバーベキューに活躍する手塚家のデッキ。

内と外の
あいだを楽しむ家

DATA
原良の家 (手塚邸)
設計・施工/シンケン
造園/美・技・匠 庭吉
竣工/2005年4月
構造/木造2階建
家族構成/夫婦+子ども2人
敷地面積/194.73㎡
延床面積/128.00㎡
1階 72.00㎡
2階 56.00㎡

右/LDKに囲まれたデッキは外側をコンクリートの壁で守られ、交差点に面しているとは思えない開放感だ。信号機は常緑樹のクスノキで隠れている。左/坪庭から和室、ダイニングを通り越してデッキが見える。「本当は敷地60坪もないくらいなんですけど、みんな『100坪以上あるんじゃない?』って言うんですよ」と夫人。視線が対角線上に抜ける効果だ。



右/「家を大きくするより敷地全体を有効に活用したほうがいい」と社長の迫英徳さん。シンケンのモデルハウスの大縁側は、訪れる人すべてを魅了する。左/「スギゴケが枯れても、その場所で自然に生える苔を楽しめばいい。それが自然を生きているということです」。庭吉の田中敏さんは静かに語った。

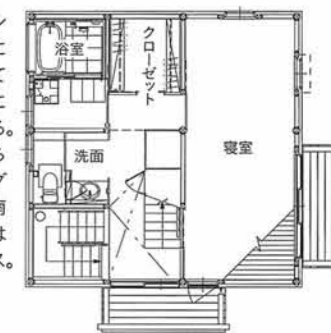
地窓に切り取られた緑が目に入る。春はヒュウガミズキ、シャラの花が終わる頃にはアジサイが咲く。秋はツツブキとモミジ、冬はツバキ。四季の移り変わりが凝縮されている。



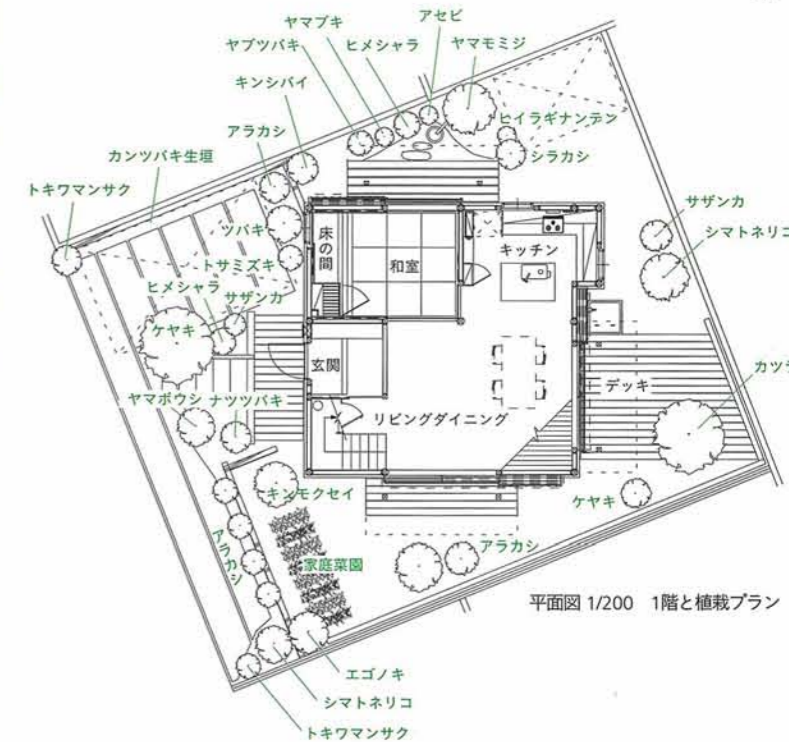
深い軒で日差しと視線を遮る。
開け放しても守られるプライバシー。

上/深い軒と板塀に囲まれているので、隣家が迫っていても視線が気にならない。「以前は庭といえばイヌマキの生け垣、と思い込んでいました」と笑うご主人。今ではこの板塀がお気に入りだ。下/和室の地窓から坪庭がのぞく。ソファに座ると、左手に坪庭、正面にデッキ、右手に家庭菜園とすべての庭を見渡すことができる。

西伊敷の家の平面図は、シンケンの庭の構成を端的に示している。敷地に対して斜めに振ることで、四隅に懐の深いコーナーをつくる。この家では北側が和室から「見る」庭。東はリビングの延長としてのデッキ。南には家庭菜園。そして西はアプローチと駐車スペース。



2階



平面図 1/200 1階と植栽プラン

シンケンの手法
涼しい家の中から、
明るい庭を眺め楽しむ。

西伊敷の家 (鹿児島市西伊敷)



DATA
西伊敷の家 (坂ノ上邸)
設計・施工/シンケン
造園/宮元園芸場
竣工/2004年8月
構造/木造3階建
家族構成/父+子ども
敷地面積/193.03㎡
延床面積/144.53㎡
1階 50.03㎡
2階 49.00㎡
3階 45.50㎡



リビングの脇の小さなスペースはゴーヤが実る家庭菜園。鹿児島ではこうして庭の一部にある菜園を「ヤシキ」と呼ぶそうだ。